

私は、数年に一度は「キリストにならいて」を読むようにしている。雑音ばかりを聞いて霊的に錆びついているので、錆を少しでも落としたいと思うからである。『キリストにならいて・イミタチオ・クリスナ』は15世紀に出版された、聖書につぐ宗教的古典として全世界の人々に読まれてきた。当然、世界中で翻訳されてきたが、日本でも、切支丹時代から、十数種の翻訳がなされてきた。私が読んでいるのは、由木康先生が訳され、1973年に出版されたものである。由木先生はパスカルの『パンセ』も訳しておられ、両書に類似するものがあると言われる。そして、知的にはパスカルの方が鋭く、霊的にはこの書の方が深い、パスカルを迎えた人はこの書をも迎え、その霊性を清め深められることを心から祈ると書いておられる。まさに、そうなのであろう。

『キリストにならいて』の著者は伝統的には、トマス・ア・ケンピスと言われていた。ところが、諸々の研究から、原著者はヘーラルト・ホロートであるというのが真実らしい。ホロートが中世のオランダ方言で書き、そのラテン語訳をトマスがあとで、加筆編集したものであることが確定したという。著者ホロートの生涯が短く紹介されていた。彼は1340年にオランダで生まれた。諸大学で多くの学問を収めた碩学の一人と目された。大学の教職に就き、富と幸福に恵まれ、世俗的享楽にふけるようになった。しかし、30歳の頃、空しさに目覚め、修道院長の指導の下、地上の事柄から離脱し、キリストに従う生活に入り、3年間、霊的な生活に励んだ。院長は、彼が説教に秀でていることを認め、修道士になるより、民衆の教化に携わることを勧めた。郷里に帰り、宣教活動を始めると、聴衆が群がるほどの盛況を呈した。神の恵みを説き、教会の弛緩と聖職者たちの退廃を指摘した。聖書を熱心に読み、新しい敬虔運動を展開した。志を同じくする団体を組織し、欧州各地に学校を設け、無料で青年教育を進めた。この運動は敵対する者を作り、殊に、聖職者の憤激を買い、司祭でない者の説教停止の命令を受けた。活動を禁止された彼は修道院に入り、瞑想と執筆に専念した。黒死病に罹った友人を見舞い、その人から感染して、重体に陥ったが、平安の内に44歳の短い生涯を終えた。敵対者が多かったため、彼の遺稿は名を冠せられなかったが、優れた内容は修道士から人々に手渡されて行った。

彼の生涯から、『キリストにならいて』に綴られた言葉の真摯さと奥深さを知らされた。心に残る言葉はたくさんあるが、第23章「死について静思すべきこと」から、ほんの数節を紹介したい。3. あなたはあたかもきょう死ぬ者のように、あなたのあらゆる行為と思想を整理すべきである。4. 幸いなのは、常に死の時を目前におき、日々死の備えをみずからする人である。修道院では「メメント・モリ、死を覚えよ」が合言葉であった。それは、今を真摯に生きることだからである。28. 今こそ最も貴重な時である。29. だのに、ああ、あなたは永遠の命の生命を獲得すべきこの時を有効に用いていない！33. 今この世に対して死ぬことを学ぶならば、かの時キリストと共に生きることを始めるであろう。今すべてのものをさげすむならば、かの時キリストのみもとへ自由に行き得るであろう。46. あなたの心を自由に保ち、神に向かって高くあげよ。「この地上には永遠の都はない」。47. あなたの霊が、世を去ったのち、主のみもとに喜ばしくのぼりゆくに足る者とせられるように、神に嘆きと涙とをもって祈りをささげよ。『キリストにならいて』は神がすぐ傍におられる言葉で綴られている。神は知性だけで受け止めるのではなく、世の欲を捨て去り、魂で身近に感受する方であることを教えられる。それが霊性ということであろう。